

## 教祖生誕200年記念講座「神人の祈り」

第一回 信心の胎動

2014年2月24日

竹部弘(教学研究所)

はじめに

- \* 金光大神が書かれたものを通して金光大神を求める。
- \* 「覚書」「覚帳」に金光大神を求める、その入口も出口も人それぞれ。

### 一、生誕の意義

#### 1 人としての命を賜る

#### 2 出生から書き起こされる「覚書」

一つ、今般(明治七年旧一〇月一五日)、天地金乃神様お知らせ。生神金光大神、生まれ所、なにか(あれこれと)古いこと、前後とも書きだし、と仰せつけられ候。

(覚書1-1)

- ・「生神金光大神」は、神からの呼びかけとも、「生神金光大神の生まれ所」とも。
- ・金光大神自身の意図でなく、神からの指図。その意図は神にしかわからぬもの、我々からは、生涯全体を通してようやく窺えるものか。

#### \* 出生の記事—人生の始まりにあるもの

金光大神生まれ所は、同国同郡占見村。香取千之助孫。父は十平、次男。氏神大宮大明神祭り日、暮れ六つ前に生まれ、男。父酉の年三十八歳の年、母は卯の年三十二の年。文化十一甲戌八月十六日、戌の生まれ、香取源七と名つけ。母は益坂村徳八娘、おしもと申し。(覚書1-2)

「私生まれ日、時、母がなにかのこと申して聞かせ」(覚書1-3-4)

#### 無条件の贈与と絶対的な制約(与えられた—選べないもの)

- \* 幼時のこと—実弟出産の際に母が難産、目に唐辛子が入って難渋、六歳の時に疱瘡、九歳の時にはしかを患う(覚書1-3-1~3)

〈参考〉小川洋子「純粋な哀しさ」『妖精が舞い下りる夜』

生まれてすぐ私のお腹の上のにせられた赤ん坊はとろけるように柔らかく、泣き声はかわいそうなくらいに切なかった。・・・人は、哀しさを抱えて生まれてくるのだと思う。手付かずの、純粋な哀しさだ。生まれてきたこと、生きることそのものにしみ込んでいる哀しさだ。しかしだからといって、人生全部がつらく苦しいものになるわけではない。人は哀しい思いをするからこそ、いたわり合った

り愛し合ったり、優しくなれたりするのだろう。人の心を掘り起こしていった、一番奥にあるこの哀しさを表現することが、小説を書くということではないだろうかと、私は新生児室のガラスの向こう側を見ながら思った。

### 3 生神金光大神の来歴

\*明治6年旧8月19日の神伝を経て、明治7年から執筆される「覚書」

天地金乃神と申すことは、天地の間においておかげを知らず、神仏の宮寺社、氏子の屋敷家宅建て、みな金神の地所、そのわけ知らず、方角日柄ばかり見て無礼いたし、前々の巡り合わせで難を受け。氏子の信心でおかげ受け。今般、天地乃神より生神金光大神を差し向け、願う氏子におかげを授け、理解申し聞かせ、末々繁盛いたすこと、氏子あつての神、神あつての氏子、上下立つようにいたし候。(覚帳 17—25—4)

—世間救済のために遣わされた使命感が注目されてきた。

\*「差し向け」の二相

何事もみな天地乃神の差し向け、びっくりということもあるぞ。(覚書 21-13-1) 人間社会に差し向けられる(遣わされる)、その前提に、全てが自分に差し向けられている(送られ与えられている)という関係

- ・使命—自身が人や社会に対して果たすべきもの(自身が送られるもの)
- ・運命—自身に送られるものであり、自身を大きなところから動かすもの

〈参考〉『小川洋子対話集』

生まれたときはみんな大きな宿命を背負っていますね。頼んだわけでもないのにどうして自分はここにいるのか、そのこと自体がもう不条理なわけです。そこから人間は、その不条理を理解し、受け入れ、自分で新しい運命と出会っていくというのが理想的なありかただと思うんです。ところがその宿命に押しつぶされてしまうと、不条理のなかからありがたいものを受け取って運命とともに育っていくのだという考えかたをするのが難しくなるのかもしれないですね。

与えられたものを生かすこと→運命を甘受する→運命と和解する→運命を実現する

## 二、実意・実意丁寧神信心

### 1 「実意丁寧神信心」—教義的位置の変遷

\*かつての意義—教祖像・教義の中核であると共に、信心実践の指標

・教祖像：「実意に勤勉に」働いたこと、日柄方位を守る徹底性、できる限りを尽くした上でなお、自らの不行き届きを詫げる姿勢\*<sub>i</sub>。

・教義：「氏子あつての神、神あつての氏子」は、「実意丁寧神信心の生き方によってのみ開かれてくる神と人とのかかわり方を示すもの」(『概説金光教』226頁)

\* 教内外からの批判的検討

・ 通俗道徳説：近世後期から明治前半期にかけて、日本の民衆が自己の心を正直・勤勉・儉約などの徳目に沿って鍛え、生活規範として生きることにより、近代化を支える力となったという説(安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』)。

・ 現代の社会で果たし得る実効性への疑問視\*ii

・ 実意丁寧神信心は金光大神の前半生において意味を持った生活態度であり、後の金光大神はそのような倫理色の強い信仰を乗り越えていったのではないかとの疑義\*iii

## 2 「実意」の諸相

\* 定義的意味

実意—思いが行き届くこと、丁寧—行いが行き届くこと、実意丁寧神信心—行き届いた思いを持ち、それが形にまで行き届いて現れるという生活態度が、そのまま神信心にも具現されたもの(『金光大神』132頁)

\* 「覚書」や伝承に見る金光大神の姿

・ 勤勉で農業経営の成功、正直で村内の信用

・ 神仏への姿勢—四国巡拝の際

・ 建築と家族の死が続く中で日柄方位の遵守

・ 四十二歳の大患時の「お断り—方角見てすんだとは私は思いません」(覚書3-5-4)

\* 実意丁寧な教祖像の、やや行き過ぎたと見える解釈

吉備津宮まいり、お日供願いあげ、二度おどうじあり。私、出世ありがたしと思つて帰り、すぐに西大寺観音へまいり。十四日出、十五日帰宅いたし。(覚書3-3)

・ 大谷村へ帰って、改めて西大寺へ向かった(旧教祖伝記『金光大神』初版本)

・ 吉備津宮から直接西大寺へ向かった—『金光大神覚』(昭和44年、金光教本部教庁)註釈によれば、「大谷から吉備津神社まで約三十二キロメートル。吉備津神社から西大寺観音院まで約二十二キロメートル。西大寺観音院から大谷まで約四十キロメートル」(教祖伝『金光大神』他、各種口語訳、私本教祖伝など。旧教祖伝記も現在の版は改訂されている))

\* 一步を生み出す心の動きとして

ある時の参拝の節、金光様が、「その方の広前の信者であろう。北の新地下原に住む入江カネと申す者が、此方に日参している。これを持ち帰って渡してやるがよい」と仰せられて、お書付をくださった。帰ってご祈念帳を調べてみると、まさにその名があったので、呼び寄せて金光様のお言葉を伝えると、カネは「その日稼ぎの忙しさに追われながら暮らしておる身でございます。どうして日参がかないましよう。一生にただ一度でも金光様のお顔を拝ませてもらいたいと、明け暮れお願いしておるばかりでございます」と答えた。そこで、「そうもあろう。その明け暮れのお願いこそ、金光様のみもとへのまことの日参である」と諭した。

(理Ⅱ白新4)

\*「実意」「実意丁寧」と「実意丁寧神信心」

・「実意」「実意丁寧」は「覚書」「覚帳」「御理解集」を通して見られ、多くは「実意にせよ」「実意であれ」という意味で将来へ向けて動きを促すもの。

・「実意丁寧神信心」は「覚書」の「実意丁寧神信心のゆえ夫婦は取らん」（安政5年12月24日）と「立教神伝」中の「此方のように実意丁寧神信心いたしおる氏子が」の2箇所のみ。神からそうであったと認められた完了形。「実意丁寧神信心」の故にここまでありえたと共に、「実意丁寧神信心」であってなお「七墓築いた」という両面

### 3 明治期の「実意」

明治期の神伝で説かれる「実意」一宮建築の棟梁や金光金吉等の「うそ」「だまし」という行為に対して言われる場合（正直・誠実等に近い意味\*iv）、金光大神広前を取り巻く不安定な状況下での姿勢として言われる場合（信仰を貫く厳しさ\*v）

\*明治6年「神前撤去」の事蹟

旧1. 21 戸長の命により神前を片付ける。

2. 15 「金光、生まれ変わり」とお知らせ。10年ぶりに入浴を許される。

2. 17 天地書附の祖型を神から示される。

2. 22 戸長が世話方森田八右衛門を呼び、内々で神勤再開を勧めるが、金光大神は断る。戸長は再度の勧め。川手保平が万一の時には身代わりに立つかと申し出るが、これも断る。

2. 23 厨子を奉斎し、神勤を再開する。

2. 24 「お上出ても、実意を立てぬき候」とお知らせ。

戸長が神前奉仕再開を許可し、世話方が「身代わりに立つ」と申し出てきた時の金光大神の態度。できるできないよりも大切なことがある。大きなものに支えられているからこそ、融通無碍とも見える姿勢を含む。

\*晩年のお知らせに見られる「実意」

・商売人に対して、儲けを優先することの放棄という形での商売の勧め

表買い入れ、仕立てのこと。上中下改め、上へ中が一枚 入りても悪し。中へ上が入りたのは大事なし。とにかく実意にいたし。末で笠岡での出世と人に言われるようにしてやる。またせがれ寅年がまいる時、沙汰にいたせい、とお知らせあり。（覚帳 20-17-1~4）

・家族に対して、事の好都合・不都合に拘わらず、神の差し向けとして起こった出来事に向き合うことなどの求め

一つ、巳の年より、家内中、身の改まり、子供四天王仲ようして和気あいあい。諸事のこと神が差し向けてやるから実意いたし、お知らせ。（明治14年正月朔日、

覚帳 25-1-1~2)

・参拝者のための宿屋を営む娘夫婦に対して、人並みの算段の放棄

十二日四つ礼まいり、理解あり。人なみに田植えすな。宿屋すれば人を助け、人を助ければ わが身も助かる。実意をいたし。ほか宿屋とはちがう。(明治 16 年正月 12 日、覚帳 27-1-2)

徹底して力を込めてゆくべき自力的方向と、逆にそれががほどけてくる方向\*vi

4 歳しくも広やかなもの

三、再び「覚書」について

\*変遷に見る神名と神号の対照性：神号は日付を伴って変遷し、その期間内で記されるが、神名にはそのような区切りがはっきりとはしておらず、「覚書」における金光大神前半生の記述内容にも、明治期に開頭したとされる天地金乃神の名が記されている→「覚書」前半生の記述に見る「天地金乃神」

\*出生からの執筆を指示するお知らせ

十月十五日早々お知らせ。一つ、此方一場立て、金光大神生まれ時、親の言い伝え、此方へ来てからのこと、覚、前後とも書きだし。金神方角恐れること、無礼断り申したこと、神祇信心いたしたこと。(覚書 22-10)

\*四十二歳の大患の事蹟―「助かり」の始まり

ここまで書いてから、おのずと悲しゅうに相成り候。金光大神、其方の悲しいのでなし。神ほとけ、天地金乃神、歌人なら歌なりとも詠むに、神ほとけには口もなし。うれしいやら悲しいやら。どうしてこういうことができたじゃろうかと思ひ、氏子が助かり、神が助かることになり、思うて神仏悲しゅうなりたの。また元の書き口を書けい。(覚書 3-6)

CF 「この度、天地神様にお助けにあずかり」(安政 5 年 12 月 24 日、覚帳 2-10)

神人共の助かり「こういうことができた」へ至る、金光大神と神ににとっての結節点  
・金光大神が一命を救われ、初めて神の思いに接し得たと共に、神が「天地金乃神」として現れる上で

\*通常の意味とは異なる「伝記」

・金光大神の伝記／神の伝記 (高橋正雄「教祖伝を頂くについて―関東教区教師研修会にて一」(『金光教報』昭和 33 年 6 月 1 日号)

・神話の歴史化と歴史の神話化：歴史と歴史を超えたものとの関係、あるいは歴史と歴史に実現されるべきものとの関係（荒木美智雄「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』『お知らせ事覚帳』」（紀要『金光教学』第23号）

一人の人間が、神に出会い、生涯かけて、信心を進めて教祖になる過程と、神が金光大神を導いて、世界に顕れる両面。二つがあるのではなく、裏表。

#### \* 神人の胎動—「天地金乃神」の胚胎

「覚書」においては、金光大神が前半生に経験した内容が、天地金乃神の神性を語る明治六年の神伝において、より普遍的な形で歴史的な脈絡として繰り返し表現されているとも言えるし、逆にまた、天地金乃神の神性を表明する脈絡が、金光大神の生涯において辿られているとも言える。換言すれば、金光大神という個人の歴史を通じて明かされた神性が明治六年の神伝に表明される過程と、明治六年の神伝で表明された神性が個人の歴史に跡づけられる過程とが同時に進行する物語\*vii

---

\*i 『金光大神』（金光教本部教庁、1953年）、高橋正雄『われを救える教祖』（著作集第5巻、1968年）、大淵千仞「教祖の信心について（上）—序説的概観—」（紀要『金光教学』第1号）、『概説 金光教』（金光教本部教庁、1972年）など。現在の教祖伝『金光大神』（金光教本部教庁、2003年）では、農作業や村仕事の態度（34～35頁）、人への思いやり（40～41頁）、四国めぐりの態度（45頁）を述べ、安政6年10月21日の所謂立教神伝の箇所「実意丁寧」について解説している（132頁）。

\*ii 安丸良夫「日本思想史における宗教史研究の意義」（『金光教報』昭和49年5月号）94頁。

\*iii 「実意丁寧」ということに限って言えば、それは教祖様の前半生、あえて言えば四十二歳位までに顕著に見られる態度であって、それ以後はそういう倫理色の強い態度を自ら乗り越えられて行かれたのではないだろうか。そうだとすると、教祖様の後半生をも含めて、全体を貫いているような一つの基本的な生きる筋道というものがあるのではないか。（瀬戸美喜雄「教会現場での『金光大神覚』の読み方」、『金光教報』昭和49年4月号巻末11頁）。

\*iv 「棟梁様と人に言われて、夫婦とも実意がなし」（覚書19-11-2・覚帳15-13-2）、「今までは、親、神ともにだまし。これから実意を立てぬき」（覚帳18-11-6）、「その人は実意で言いぬき、願主がしくじり、屋敷を立ち去り。これらが、まったくそねみでわが身へ難を受けと、話いたされ」（覚書19-3-6）。

\*v 「一つ、始終仕合わせ。何事も世話苦にすな。実意（に）いたし。きょうといことも、こわいこともなし。どのようなことありても逃げな、逃げることなし。何事も人を頼むと言うな。」（覚書19-9-1・覚帳15-11-1、但し「覚帳」では（）内はなく、次の箇所は違いがある。「どのようなことあっても逃げることなし。何事も人に頼むと言うな」）。

\*vi 竹部弘「近世農民の世界観と金光大神の信仰」（紀要『金光教学』第38号）

\*vii 竹部弘「覚書」における金光大神前半生と天地金乃神」（紀要『金光教学』第34号）